# *Munimatālaṃkāra* における Candrakīrti について

## *Madhyamakāvatāra* 及び *Madhyamakāvatārabhāṣya* の引用を中心として

研究員　松本　恒爾

昨年度の本研究発表会において、Jayānanda（c.1100-1150）の *Madhyamakāvatāraṭīkā*（以下 MAṬ）Chap.12 v.5 において批判される五智説を説く「ある者」が Abhayākaragupta（c.1050-1100）である可能性を指摘した。[1] しかし、Abhayākaragupta の *Munimatālaṃkāra*（以下 MMA）においても、自説の根拠として、Candrakīrti（c.600-650 or c.530-600）の *Madhyamakāvatāra*（以下 MA）及びその自注（*Madhyamakāvatārabhāṣya* 以下 MABh）が頻繁に引用されている。今回の発表では、MMA における MA 及び MABh の引用される箇所を検討することで、そこでどのような Candrakīrti の説が重要視されているかを明らかにした。

発表者が特定できた限り、MMA おいて MA 及び MABh が引用されるのは五箇所である。[2] まず以下に、MMA における引用個所をデルゲ版（D.）と北京版（P.）によって、また MA 及び MABh の該当箇所を LVP［1907-12］によって示す。

- C.1 : MMA Chap.3（D.175b5-176a1, P.226b8-227a6.）
  ＝MA Chap.1 v.8.（LVP［1907-12］p.17 *l*.16-p.19 *l*.17.）
- C.2 : MMA Chap.3（D.180a5-b2, P.233b2-8.）
  ＝MABh Chap.8 vv.3-4ab（趣意）（LVP［1907-12］p.346 l.6-p.347 *l*.10.）
- C.3 : MMA Chap.3（D.208a4-b1, P.271b4-271a1.）
  ＝MABh Chap.12 vv.8-9.（趣意）（LVP［1907-12］p.361 l.9-p.363 *l*.11.）
- C.4 : MMA Chap.3（D. 218a3-b1, P.286a1-b2.）
  ＝MA Chap.12 v.4.（LVP［1907-12］p.357 *l*.11-p.358 l.17.）
- C.5 : MMA Chap.3（D. 222a1-b,2 P.291b6-292a1.）
  ＝MA Chap.6 v.214.（LVP［1907-12］p.337 *ll*.4-7.）

次に、以上の五箇所から明らかになることを列挙するならば、以下のようになるだろう。

（1）すべての引用が、『八現観の光明』（*mNgon par rtogs pa brgyad kyi snang ba*）と題される MMA Chap.3 においてなされている。ここでの八現観とは *Abhisamayālaṃkāra*（以下 AA）において説かれるそれを指す。

（2）C.1 においては、声聞や独覚が空性を証得する者で

あり、菩薩の智がそれらを超越するのが第七遠行地においてであるとする Candrakīrti の独自の説が採用されている。

（3）C.2 においては第八地不動地を解説する際に、自説を根拠づけるものとして、Candrakīrti の説が *Abisamayālaṃkāravṛtti* の著者 Āryavimuktisena の説と並置されている。このことから、Candrakīrti の説がかなり高く評価されていたと考えられる。MMA においては、AA 対する解釈として Āryavimuktisena の説が正説とされ、Haribhadra の説はそれから逸脱するものとして批判される。[3]

（4）C.3, C.4, C.5 のいずれも、AA Chap.8『法身章』（*Dharmakāyādhikāro ṣṭamaḥ*）で説かれる仏身や仏智に対する解釈の根拠として引用されている。

これら列挙した事項からは、MMA において重要視されているのが中観論者としての Candrakīrti の説というより、むしろ何かしら AA における修行体系との関連性をもちうるような、つまり *Daśabhūmika* に対する注釈者としての Candrakīrti の説であるようである。[4] これは AA に対する注釈書の一つとして数えられる MMA という著作の性格[5]を考えれば当然であるとも言うことができるが、しかしあるいは Abhayākaragupta による Candrakīrti の中観思想に対する高い評価が前提としてあり、[6] Candrakīrti の主著である MA 及び MABh をこれも高く評価する AA の修行体系の中にどうにかして組み込もうとした試行錯誤の結果であるかもしれない。この問題については、今後の研究によって Abhayākaragupta の中観思想を明らかにすることで明らかにしていきたいと考えている。[7]

・註

（1）MAT において批判される「ある者」が Abhayākaragupta である可能性については松本［2011］を参照。

（2）Vose［2009］は、Candrakīrti に帰せられる *Guhyasamājatanra* に対する注釈書 *Pradipoddyotana*（以下 PU）が MMA において引用されているという。さらに、MA 及び MABh と *Trinśaranasaptati* の著者を slob dpon Zla ba grags（ācārya Candrakīrti）、もしくは単に Zla ba grags（Candrakīrti）と呼び、*Pradipoddyotana*（以下 PU）の著者を 'phags pa Zla ba（ārya Candra）と呼ぶことで、Abhayākaragupta が中観論師の Candrakīrti と密教者の Candrakīrti を区別していた可能性があるともいう（*ibid.*p.34 and n.113）。しかし、Vose［2009］がいう MMA における ārya Candra という用例や PU の引用を確認することが発表者にはできなかった。おそらく、これは、「聖なる *Candrapradipa*（= *Samādhiraja*）において言われている」（'phags pa Zla ba sgrom mar gsungs）（D.111b1-2, P.126b4-5.）という文章を、「Ārya Candra［kīrti］が *Pradipa*［-*uddyotana*］において言う」というように誤読したことによる勘違いであろう。当然、そこでの引用内容（D.111b2-6, P.126b5-127a7）も *Candrapradipa* からのもの

である（Cf. Vaidya［1961］p.24 *l.*27-p.25 *l.*10 and 松濤［1975］pp.790（七）*l.*5-*l.*16）。

（3）Abahyākaraguptaによる Haribhadra 批判については、磯田［1982］を参照。

（4）周知のとおり、MA は *Daśabhūmika* において説かれる十地にもとづいて著作されており、その中でも最も分量が多く、Candrakīrti によってその中観思想が明らかにされるのは第六章（現前地）においてである。MMA においてはこの第六章が一度だけ引用されているが（C.5）、それも彼の中観思想を重視しているからというより、一切相智という AA の修行体系に関係するものが説かれているからであると考えられる。

（5）MMAの概要については、磯田［1981］,［1983］等を参照。

（6）Abhayākaraguptaは、Candrakīrti による *Śūnyatāsaptativṛtti*（以下 ŚSV）のチベット語訳に関与している。また、Candrakīrti の著作（*Prsannapadā*, MABh, *Catuḥśatakaṭīkā*）に対する注釈書である *Lakṣaṇaṭīkā*（以下 LṬ）は、sṇur (sñur) Dharma gragsによって自身の理解にために筆写されたらしいが、彼の監督者であったとされる Abhayākaraguptaによる解釈が反映されている可能性があるらしい（Cf. Yonezawa［2001］pp.4-8 and p.27 "A Hypothesis of the Author"）。今後、LṬ の MABh Chap.7 以降のテキストが公になれば、本発表で提示した MMA における MA 及び MABh の引用すべてとの比較が可能となり、何かしら新しい知見が得られるかもしれない。

（7）mKhas grub rjeによる *sTong thun chen mo* においては、Abhayākaraguptaは Śāntarakṣita 系統の自立論証中観派の論師として分類されている（Cf. Ruegg［1981］pp.114-115, Cabezón［1992］p.82.）。しかし、八千頌般若に対する注釈である *Marmakaumudī* においては、Abhayākāraguptaによって Haribhadra とともに Śāntarakṣita が批判されていることが指摘されている（Cf. 磯田［1993］p.509）。このように Abhayākaraguptaの中観思想については、未知な部分が多いのであるが、幸いにも近年、Abhayākaraguptaの中観思想が説かれていると考えられるもののチベット訳すらされなかった著作 *Madhyamakamañjarī* のサンスクリット原典が発見されたらしい、MMA のそれとともに、その公開が期待される（Cf.Ye［2009］pp.324-325.）。

・参考文献（本稿内で言及したもののみ）


・Cabezón, Ignacio José

1992 : A Dose of Emptiness, An Anotated Translation of the sTong thun chen mo of mKhas grub dge legs dpal bzang, Albany.

・磯田　熙文（Isoda Hirohumi）

1981 :『Munimatālaṃkāra』について　印度学仏教学研究 vol. 29(1) pp.93-99.

1982 : Abhayākaraguptaの Haribhadra 批判　印度学仏教学研究 vol. 30(2) pp.30-35.

1983 :『Munimatālaṃkāra』について(2)　印度学仏教学研究 vol. 31(2) pp.116-121.

1993 : Abhayākaraguptaと『Madhyamakāloka』　インド学密教学研究　上　宮坂宥勝古希記念論文集―pp.501-516.

・la Vallée Poussin, Louis de（＝LVP）
1907-12: Madhyamakāvatāra par Candrakīrti［Bibliotheca Buddhica 9］, St. Pétersbourg (repr. Motilal Banalasidass 1992).
・松濤　誠廉（Matsunami Seiren）
1975：梵文月燈三昧經　大正大学研究紀要 vol.61 pp.796（一）-761（三六）.
・松本　恒爾（Matsumoto Kōji）
2012：*Madhyamakāvatāra-ṭīkā* Chap.12-v.5 和訳研究 ACTA TIBETICA ET BUDDHICA vol.5 pp.43-89
・Ruegg, David Seyfort
1981：The Literature of Madhyamaka school of Philosophy in India［A History of Indian Literature Vol. VII Fasc.1］, Otto Hrrassowitz, Wiesbaden.
・Vaidya, P. L.
1961：Samādhirājasūtra［Buddhist Sanskrit Texts No.2］, Darbhanga.
・Vose, A. Kevin
2009：Resurrecting Candrakīrti, *Disputes in the Tibetan Creation of Prāsaṅgika*, Boston.
・Ye Shaoyong
2009：A preliminary survey of Sanskrit manuscripts od Madhyamaka texts preserved in the Tibet Autonomous Region, Sanskrit manuscripts in China：Preceedings of a panel at the 2008 Bejin Seminar on Tibetan Studies October 13 to 17 pp.307-335（as collaborator）,.
・Yonezawa Yoshiyasu（米澤　嘉康）
2001：INTRODUCTION to the Facdimile Edition of a Collection of Sanskrit Palm-leaf Manuscripts in Tibetan *dbu med* script,（as collaborator）, Taishō University.
2007：*Lakṣaṇaṭīkā* Sanskrit Notes on the *Madhyamakāvatārabhāṣya* Chapter I Revised, Essays on the Sanskrit and Buddhist Culture, Prof. Y. Matsunami's Felicitation Volume presented to him on his seventieth birthday（松濤誠達先生古稀記念　梵文学研究論集）pp.583-598.
2012：**Lakṣaṇaṭīkā* Sanskrit Notes on the *Madhyamkāvatārabhāṣya* Chapter II-V, 成田山仏教研究所紀要 vol.36 pp.69-102.
2013：**Lakṣaṇaṭīkā* Sanskrit Notes on the *Madhyamkāvatārabhāṣya* Chapter VI, 成田山仏教研究所紀要 vol.36 pp.107-175.